

生成AIを活用した 魅力ある授業づくり

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

令和8年度 教育課程研究集会（小学校音楽）

徳島県立総合教育センター

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】



教職員や教育委員会等の学校教育関係者を主たる読み手として、学校現場における生成AIの適切な利活用を実現するための参考資料となるよう、生成AIの概要や基本的な考え方、場面や主体に応じて押さえておくべきポイントをまとめたもの。



1. 生成AIについて

生成AIの概要



- 生成AIとは、文章、画像、プログラム等を生成できるAIモデルにもとづくAIの総称
- 汎用的なサービスだけでなく、様々な提供形態・提供主体が出現し、教育分野にも導入
- 様々なリスクの存在が指摘される一方で、技術的な対策も進展

2. 基本的な考え方

人間中心の利活用



- 生成AIを有用な道具になり得るものと捉え、出力を参考の一つとして、リスクや懸念を踏まえた上で、最後は人間が判断し、責任を持つことが重要
- 学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味した上で利活用
- 学びの専門職としての教師の役割が一層重要

情報活用能力の育成強化



- 生成AIの仕組みの理解、学びに生かしていく視点、近い将来生成AIを使いこなすための力を、各教科等の中において意識的に育てていく姿勢は重要
- 生成AIが社会生活に組み込まれていくことを念頭に、情報モラルを含む情報活用能力の育成を一層充実させていくことが必要

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

教職員が校務で利活用する場面



- 校務において利活用することで、校務の効率化や質の向上等、働き方改革につなげていくことが期待される
- 教職員自身が新たな技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点を知っておくことは、児童生徒の学びをより高度化する観点からも重要
- 生成AIの仕組みや特徴を理解した上で、生成された内容の適切性を判断できる範囲内で積極的に利活用することは有用

児童生徒が学習活動で利活用する場面



- 発達の段階や情報活用能力の育成状況に留意しつつ、リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討すべき。その際、学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味することが必要
- 「生成AI自体を学ぶ場面」、「使い方を学ぶ場面」、「各教科等の学びにおいて積極的に用いる場面」を組み合わせたり往還したりしながら、生成AIの仕組みへの理解や学びに生かす力を高める

教育委員会等が押さえておくべきポイント



- 教育委員会が主導して制度設計や方向性を示すことが重要
- 各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じるが必要であり、一律に禁止・義務付けるなどの硬直的な運用は望ましくない
- 先行事例や教材・ノウハウの周知・共有、研修の実施により、生成AIの適切な利活用を推進する環境を整備することが必要

共通して押さえておくべきポイント



- 安全性を考慮した適正利用
- 公平性の確保
- 情報セキュリティの確保
- 透明性の確保、関係者への説明責任
- 個人情報・プライバシー
- 著作権の保護

参考資料編

- 各場面や主体に応じたチェック項目、生成AIパイロット校における先行取組事例、学校現場において活用可能な研修教材 等

AIを「機械」として扱うか、「道具」として使いこなすか



AI=機械

- 主語：AI
- 思考を放棄し、出力に身を委ねる。
- 結果として児童の能力が育たない。

児童（主役）

AI
(壁打ち相手)

教師
(ファシリテーター)



AI=道具

- 主語：児童（先生）
- 自らの目的意識を持って使いこなす。
- 知性や思考を何倍にも拡張するパートナーとなる。

教師として、この新たな道具を自在に使いこなす姿を見せることが大切。

音楽科の目標とAIの立ち位置 01

資質・能力の三つの柱

- ・知識及び技能:
曲想と構造の関わりの理解、表現に必要な技能
- ・思考力、判断力、表現力等:
表現の工夫、味わって聴くこと
- ・学びに向かう力、人間性等:
音楽を愛好する心情、豊かな情操

AIが支えるプロセス

AIは特に「**どう表現するかを工夫する過程**」や「**音楽のよさを判断する過程**」をサポートする。

表現の技能が未熟な生徒であっても、AIを「**補助輪**」とすることで、自らの「思いや意図」を音や言葉に表す試行錯誤が可能になる。

| 「音楽的な見方・考え方」を働かせる 02

ICTやAIを活用しながら・・・



音楽に対する感性

「なんとなくいいな」と感じる直感を大切にし、心動かされる体験からのアプローチを始める。



音楽を形づくる要素

音色、リズム、旋律、強弱などの具体的な要素と、その働きにフォーカスして音楽を捉える。



自己のイメージと関連付け

感じたことと要素を結びつけ、背景にある伝統・文化や自己の感情とを結びつける。

音楽科におけるAIの役割 03



1. 表現意図を具体化する「ガイド」

歌唱、器楽、音楽づくりにおいて、児童自身の「こう表現したい」という音楽的な思いや意図（解釈や工夫）を視覚的・聴覚的に提案し、演奏へのこだわりを促進する。



2. 感性を言葉に紡ぐ「パートナー」

鑑賞において、感じ取った抽象的なイメージを具体的な音の要素（旋律、リズム等）と結びつける対話により、言語化のプロセスを支援する。

実践例① 表現：「花」 滝廉太郎 04

【Geminiの活用】

曲想と歌詞の内容（背景）の関わりを捉える

♪ 表現活動の手立てとして

例えば、「桜（かい）のしずくも花と散る」という情景。
小学生には少しイメージしにくいこの瞬間をAIで画像化することで、当時の隅田川に舞う美しい桜の雫を視覚的に感受する。（先生が作成、もしくは児童が自分のイメージを具現化）

♪ 表現の工夫

具体的な情景イメージから、「この美しくはかない雫を表すには、どんな強弱や音色で歌えば良いか」を児童自身が考え、表現意図を構築する。



実践例② 鑑賞：「アイネ クライネ ナハトムジーク」 モーツァルト 05

【Gemの活用】

知覚したことと感受したことの関わりを考える（深化）

「楽しい感じがする」という主観的な感想（感受）を、音楽を形づくっている要素（知覚）と結びつける。

🎵 AIとの「対話（壁打ち）」：

「なぜそう思う？」「音楽は明るい？」「旋律の動きや音の高さにも注目してみよう」とAIに問いかけさせることで、児童は根拠のある自分なりの音楽評価を自発的に組み立てる。



| Gemを使ってみよう！ ～AIとの対話体験～



STEP 01

Classroomを開く

ブラウザで Classroom にアクセスし、研修用アカウントでログインする。



STEP 02

クラスを選ぶ

一覧の中から本日の研修用クラス「R8中 音楽【教育課程研究集会】」をクリックして開く。



STEP 03

授業リンクを開く

「授業」タブから、対象のトピック内にある「Gemへのリンク」を開く。



STEP 04

対話スタート！

まずは【感想】を書いて送信。
Gemの返答にさらに質問を重ねる。

| 先生の「最強の助手」としてのAI 07



教材研究の効率化

NotebookLM に指導要領や楽曲情報を読み込ませ、児童の探究を深める本質的な「問いかけ・発問」案を短時間で作成・計画



振り返りの分析・集約

スプレッドシート等に集まった児童の全員分の振り返り記述を、AIが要約・分析。生徒一人ひとりの理解度を瞬時に把握



生徒と関わる時間の創出

事務作業や指導案作成をAIが分担することで、「児童一人一人に寄り添う」という人間にしかできない指導時間を作り出す。

ただし、教師自身が確認し、調整を行うこと

| AI活用のルールと注意点 08



個人情報保護を徹底する

児童の氏名や成績、プライベートな情報は決してAIの入力画面（プロンプト）に入力しない



著作権の尊重と自己表現の保持

AIが出力した文章やアイデアをそのまま自分の意見にするのではなく、必ず自分自身の言葉や思いで表現を調整



ハルシネーション（もっともらしい嘘）への批判的視点

AIの解説や音楽情報が正しいかどうかを、「楽譜（エビデンス）」や「教科書・教科書音源」という確かな事実

| まとめ 09

今日から始まる、
AIとの新しい対話。

音楽室からワクワクを
広げていきましょう。

